

2021年4月25日 礼拝説教要旨

詩編講解説教58 「神はいます！」

詩編58：2～12、ルカ23：44～49

第58編は詩編の分類では「嘆きの詩編」になります。詩編にはこの「嘆きの詩編」が多いのですが、その中でもこの58編は特に人気がありません。注解書の中にはこの58編について「教会員の多くにとって好ましい詩編には映らない」とあるとか「新約の福音の立場からは問題であり」という記述があります。またこの詩編は教会の祈りから除外されたことがあると伝えられています。暴力的な血なまぐさい表現などが、心静かに黙想することを妨げるというのであります。実際にわたしもここを準備しながら、例えば「流産」(9節)の表現があります。こういうところは語る者がどうしても躊躇してしまうところでもあります。ここを読んで辛い経験を思い出すということがあるかもしれません。

でも同時に思うのは、聖書はこういった人間のありのままの嘆きを深く見つめているということです。「お前たちはこの地で不正に満ちた心をもってふるまい、お前たちの手は不法を量り売りしている」(3節)不正がはびこり正義が曲げられる。どこの国でも、どの時代でも、力ある者、権力者によって正義が曲げられ、社会的に弱い立場にある者たちが虐げられるということがあります。また7節に「獅子の牙」とあります。キリスト教の迫害の中で捕らえられ獐猛なライオンの餌食になった人々がたくさんおりました。11節の「神に逆らう者の血で足を洗うであろう」とありますが、この「血で足を洗う」という表現は戦場の惨劇を表す隠喩です。

こういう表現を通して、詩編はわたしたちのリアルな嘆きを呼び戻そうとしているのではないのでしょうか。わたしたちは人生で経験する嘆き、悲しみに本当に向き合っているのでしょうか。どうもわたしたちは無意識のうちにも嘆きを否定し、見ないようにしています。時々、銀行や郵便局などで大声で怒鳴っている人を見かけます。そういう時にわたしたちはそっとその場から離れたり、携帯を眺めたりして見ないようにしたりするのです。それはそういうものを避けたいという思いがあるからです。あるいはそのようにして自分の中の攻撃性を否定しようとしているのかもしれません。自分はある人前で怒鳴るようなことはしない。自分は穏やかで成熟した人間だ。そうやって嘆きを遠ざけるのです。教会もしかりです。こういう嘆きの詩編を遠ざけてしまう。それよりも教会は平和で落ち着いて安定しているのだとアピールしたい。それは本当に主の前に真実な姿なのだろうか。むしろそのことでわたしたちの嘆きを負ってくださった神さまを見過ごしてしまっているのではないのでしょうか。

だからこそ詩編は逆に嘆きに徹するのです。不正を糾弾し、暴力を告発します。そのようにして決して神さまはこの不正をお忘れではない、暴力を見て見ぬ振りにはされないということをわたしたちに示しているのです。そしてもっとも大切なことは、神さまはただ嘆きを数えられるだけではない。それが最後のことではないということです。世界は決して暴力や悲しみに向かっているわけではありません。最後のことは、58編の最後に書いてあります。「神に従う人は必ず実を結ぶ。神はいます。神はこの地を裁かれる」(12節)58編はこの12節がなかったならば、本当に語りようがないものになってしまうかもしれません。でも最後にこの12節があるから希望があります。「神はいます」これで救われるのです。そのような神も仏もないという現実の中に、それでも神さまはおられる。そして神さまが最終的に裁かれる。正義を行われるのです。そこにわたしたちは希望を見えています。

どうしてそれがわかるのか。それはイエス・キリストを通してはっきりと示されます。今日は主イエスの十字架の死の箇所を読みました。あの十字架に至るキリストの御受難は、目を背けたくなるような人間のあらゆる残虐性、暴力が凝縮しているところです。また公正な仕方ではなく、真実が歪められる形で裁判が行われた。それゆえ全地は暗くなり、太陽も光を失う。罪の闇、死の闇に完全に支配された場所、それが十字架です。それこそ神も仏も無い、このようなところに神さまはおられないと言い切れる、その場所こそ十字架です。

ところが、その十字架の一部始終を見届けた百人隊長が言うのです。「本当にこの人は正しい人だった」(ルカ23:47)と。そして神を賛美したと言います。マルコでは「本当にこの人は神の子だった」(15:39)としています。神も仏もあるかと嘆く、まさにそのところで「神はいます」とこの人は言った。そこに正義を見る。神さまを見る。正しさ、それは神さまの正しさ、真実です。あらゆる不正と暴力が満ちているその中で「神はいます、神はこの地を裁かれる」と詩人が祈りを込めて言う、その祈りはキリストによって聞かれました。このどうしようもない人類の罪を神さまが今この十字架で裁かれている。他でもない神さまの独り子イエス・キリストがわたしたちの罪の全てを負って裁かれたのです。そこに正義があります。それは人間が作り出す安っぽい正義ではありません。人間の正義はやがて不正に変わるでしょう。暴力に変わります。けれどもキリストが十字架で打ち立ててくださった正義は闇の中で輝く光であり、その光がわたしたちを闇の中でも輝かせるのです。嘆きを賛美に変えるのです。それがキリストの十字架とよみがえりの救いです。

その救いはわたしたちの具体的な行動になって表れるでしょう。「神に従う人は必ず実を結ぶ」(12節)とあります。不正を誤魔化さず、暴力を否定し、平和を造り出す努力を惜しまない。そういう新しい生き方を生み出すのです。そしてそのようなわたしたちの生き方が、これに触れた周囲の人たちに「ここにも神はいます」という告白を可能にするのです。